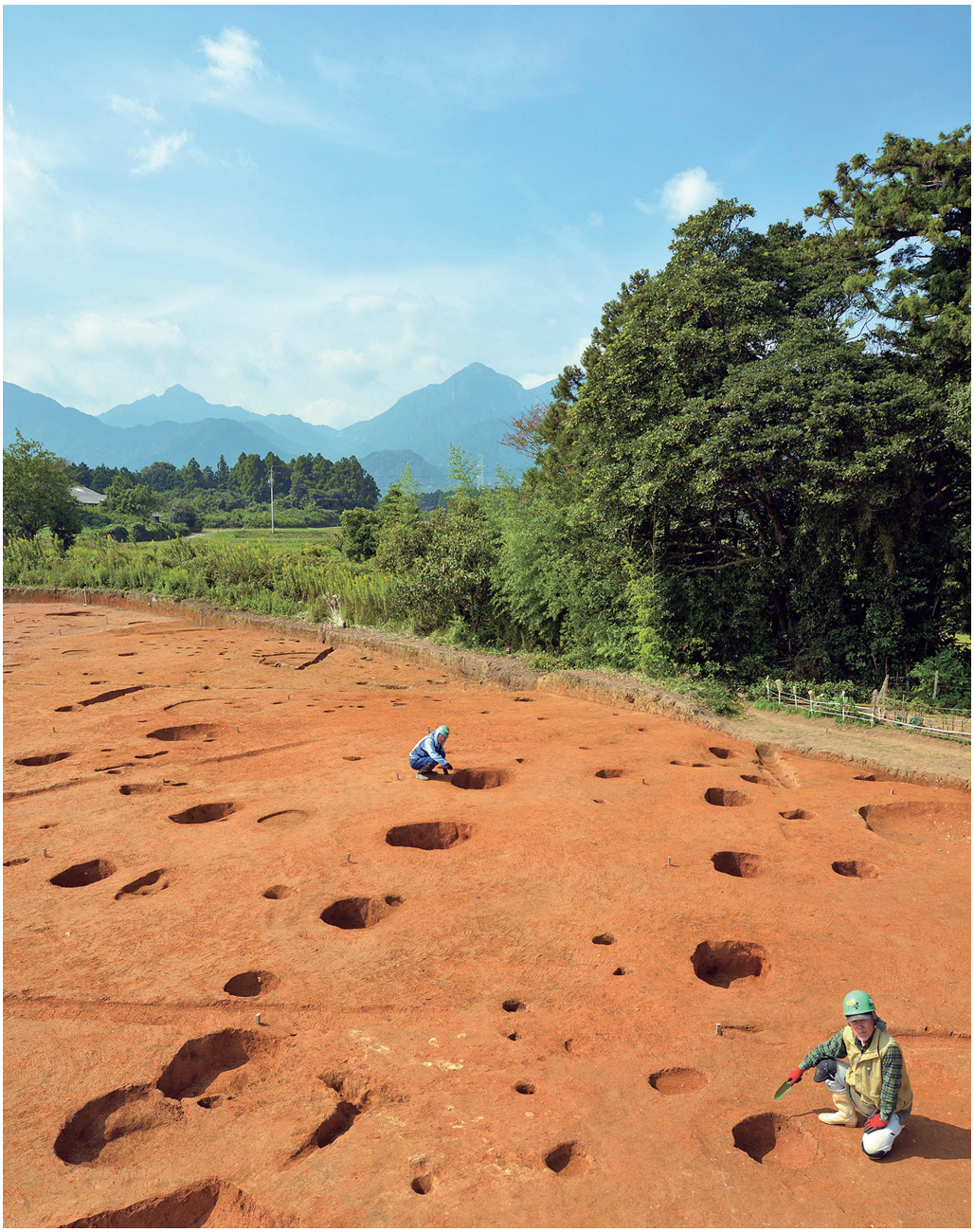
近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ



2016（平成28）年10月

三重県埋蔵文化財センター

北山Ｃ遺跡・西山古墳群全景（東から）

小牧南遺跡　石囲炉（東から）

鈴山遺跡西部（北東から）

釜垣内遺跡全景（南東から）

例　　言

1　本書は、平成 27 年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。

2　調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査は、下記の体制で実施した。

委託者　中日本高速道路株式会社

受託者　三重県

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究３課（四日市駐在）

課長　森川常厚

主幹　服部芳人（課長代理）・松永公喜・浅野隆司・谷口隆亮・宮﨑久美・大川 操・溝田 靖

主査　水橋公恵・中村法道・勝山孝文

主事　西脇智広・村上 央

4　調査面積・期間等は下表による。

遺跡名(調査次)	調査面積　㎡	調査期間	担当者	作業受託
北山Ｃ遺跡（第６次）	2,423	H27.6.5 ～ H27.12.11	松永・水橋	㈱島田組
小牧南遺跡（第３次）	5,935	H27.6.5 ～ H28.1.18	宮﨑・勝山・村上	㈱島田組
鈴山遺跡（第２次）	6,256	H27.5.27 ～ H27.12.7	中村・西脇	㈱アート
釜垣内遺跡（第５次）	3,644	H27.5.27 ～ H27.12.18	浅野・谷口・大川	㈱アート
小社遺跡(第４次)	362	H28.1.12 ～ H28.2.4	谷口・村上・大川	(ネクスコ労務提供)
北山Ｃ遺跡（一次）	216	H27.10.19 ～ H27.10.22	村上・服部	(ネクスコ労務提供)
高ノ瀬遺跡（一次）	400	H27.4.21 ～H27.4.23	服部	(ネクスコ労務提供)
高ノ瀬遺跡（一次）	208	H27.7.7 ～ H27.7.9	服部	(ネクスコ労務提供)
高ノ瀬遺跡（一次）	240	H27.10.5 ～ H27.10.7	服部	(ネクスコ労務提供)

5　発掘調査及び本書の作成に際しては、石井寛氏・久保友康氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

6　本書で示す方位はすべて座標北で示し、測量には世界測地系を用いている。

7　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝、古墳周溝　ＳＦ：煙道付炉穴・集石炉

ＳＫ：土坑、古墳主体部、土壙墓、陥し穴（落し穴）土器埋設坑　ＳＸ：埋甕炉　ＳＺ：石列

ＮＲ：川跡

本　文　目　次

1　前言……（服部）（１）

2　北山Ｃ遺跡（第６次）・西山古墳群……（松永）（８）

3　小牧南遺跡（第３次）……（宮﨑・勝山・村上）（12）

4　鈴山遺跡（第２次）……（中村・西脇）（21）

5　小社遺跡（第４次）……（大川）（29）

6　釜垣内遺跡（第５次）……（大川）（32）

7　北山Ｃ遺跡（一次）……（村上・服部）（39）

8　高ノ瀬遺跡（一次）……（服部）（40）

写　真　目　次

表紙　鈴山遺跡縄文時代中期掘立柱建物（北東から）

巻頭図版１　北山Ｃ遺跡･西山古墳群全景（東から）

小牧南遺跡　石囲炉（東から）

巻頭図版２　鈴山遺跡西部（北東から）

釜垣内遺跡全景（南東から）

１　前言

写真１　八郷の歴史探検隊出前講座 …… 7

写真２　北山Ｃ遺跡現地説明会 …… 7

写真３　釜垣内遺跡現地説明会 …… 7

写真４　鈴山遺跡見学会 …… 7

写真５　イオンモール東員遺物展示 …… 7

写真６　北星高校出前講座 …… 7

２　北山Ｃ遺跡（第６次）・西山古墳群

写真７　西山 46 号墳（東から） …… 8

写真８　西山 11 号墳・ＳＫ 303（東から） …… 8

写真９　西山 47 号墳（東から） …… 9

写真 10　西山 55 号墳（北から） …… 9

写真 11　西山 55 号墳北溝土層（北東から） …… 9

写真 12　ＳＫ 315（北から） …… 9

写真 13　ＳＢ 70（南東から）…… 9

写真 14　ＳＫ 318（南東から） …… 10

写真 15　ＳＫ 319（東から） …… 10

写真 16　調査区風景（東から）…… 10

写真 17　調査区西部（北東上空から）…… 11

写真 18　調査区中央部（西から）…… 11

写真 19　調査区東部（北上空から）…… 11

３　小牧南遺跡（第３次）

写真 20　調査区全景（東上空から）…… 12

写真 21　ＳＨ 335（北西から）…… 14

写真 22　ＳＨ 344（南から）※ＳＨ 339 が重複… 14

写真 23　ＳＨ 355 と石囲炉（南東から）…… 14

写真 24　ＳＨ 360（南東から）…… 14

写真 25　石囲炉（南東から）…… 15

写真 26　石囲炉 検出時（南から） …… 15

写真 27　ＳＸ 310 埋甕炉（南から） …… 15

写真 28　ＳＸ 310 埋甕炉の断面（南から） …… 15

写真 29　ＳＢ 327（東から）…… 15

写真 30　ＳＫ 342 陥し穴（北から）…… 15

写真 31　竪穴住居出土縄文土器 …… 16

写真 32　石鏃・掻器・打製石斧・磨製石斧 …… 16

写真 33　ＳＨ 355 石囲炉出土黒曜石剥片 …… 16

写真 34　ＳＨ 324（西から）…… 18

写真 35　ＳＨ 332（南から）…… 18

写真 36　ＳＨ 338（北から）…… 18

写真 37　ＳＢ 325（北から）…… 18

写真 38　ＳＫ 334（東から）…… 18

４　鈴山遺跡（第２次）

写真 39　御在所岳を望む調査区全景（東から）… 21

写真 40　ＳＦ 60（北から） …… 21

写真 41　ＳＦ 53 半裁（東から）…… 23

写真 42　SF 52（左下）・SF 53（中）・SF 54（右上）・SF 99（SF 53 底面下）（北西から）…23

写真 43　ＳＨ 50（東から） …… 23

写真 44　ＳＨ 84（北西から） …… 23

写真 45　ＳＢ 85・ＳＢ 86・ＳＢ 87（南東から）…24

写真 46　ＳＢ 88（西から） …… 25

写真 47　ＳＢ 89・ＳＢ 105・ＳＨ 63（西から）…26

写真 48　ＳＢ 89 柱穴Ｃ柱痕跡（南から）…… 26

写真 49　ＳＢ 89 柱穴Ｄ土器出土状況（北から）…26

写真 50　ＳＫ 61（北西から） …… 26

写真 51　石鏃・剥片 …… 27

写真 52　出土土器 …… 28

５　小社遺跡（第４次）

写真 53　第４次調査区全景（南から） …… 29

写真 54　ＳＫ 115 埋甕（北から）…… 30

写真 55　ＳＫ 23 出土鍵 …… 30

６　釜垣内遺跡（第５次）

写真 56　調査区全景（北東上空から） …… 32

写真 57　石溜土坑ＳＫ 193（南西から）…… 34

写真 58　石溜土坑ＳＫ 194（南西から）…… 34

写真 59　土器埋設坑ＳＫ 210（北東から）…… 34

写真 60　ＳＤ 203 とＮＲ 152･213（北東から）… 35

写真 61　浄瓶 …… 36

写真 62　石鏃 …… 36

写真 63　ＳＸ 76 和鏡…… 37

写真 64　ＳＸ 76 鏡箱・鋏・毛抜き…… 37
７　北山Ｃ遺跡（一次）
写真 65　調査坑№.９（南から）…… 39
８　高ノ瀬遺跡（一次）
写真 66　調査坑 36（西から）…… 40

挿　図　目　次

１　前言
図１　遺跡位置図（1:100,000）…… 3
図２　北山Ｃ遺跡調査区位置図（1:4,000）…… 4
図３　小牧南遺跡調査区位置図（1:3,000）…… 4
図４　鈴山遺跡調査区位置図（1:2,000）…… 5
図５　小社遺跡調査区位置図（1:2,000）…… 5
図６　釜垣内遺跡調査区位置図（1:3,000）…… 6
２　北山Ｃ遺跡（第６次）・西山古墳群
図７　遺構配置図（1:1,200）…… 11
３　小牧南遺跡（第３次）
図８　遺構配置図（1:800）…… 13
図９　ＳＨ 355 石囲炉出土剥片重量 …… 16
図 10　ＳＨ 324 遺物出土状況図・見通し断面図（1:40）
…… 19
図 11　ＳＨ 324 出土遺物（1:4）…… 19
４　鈴山遺跡（第２次）
図 12　遺構平面図（1:600）…… 22
図 13　ＳＢ 85・ＳＢ 86 平面図・断面図（1:100）
…… 25
図 14　ＳＦ 52 出土押型文土器実測図（1:2）…… 28
５　小社遺跡（第４次）
図 15　第４次調査区遺構平面図（1:400）…… 29
図 16　ＳＫ 115 出土状況図（1:40）…… 30
図 17　ＳＫ 115 出土土師質甕実測図（1:10）…… 30
図 18　出土鍵実測図（1:2）…… 30
図 19　第２次～４次調査区配置図（1:500）…… 31
６　釜垣内遺跡（第５次）
図 20　調査区配置図 …… 32
図 21　第５次遺構平面図（1:500）…… 33
図 22　ＳＫ 210 出土状況図（1:40）…… 34
図 23　ＳＸ 76 副葬品実測図（1 ～ 11　1:4、
12 ～ 16　1:2）…… 37
図 24　第２次～５次調査遺構図（1:1,000）…… 38
７　北山Ｃ遺跡（一次）
図 25　調査坑位置図（1:3,000）…… 39
８　高ノ瀬遺跡（一次）
図 26　調査坑位置図（1:2,000）…… 40

表　目　次

１　前言
表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀
山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表　… 2
表２　普及公開活動一覧 …… 6
３　小牧南遺跡（第３次）
表３　古墳時代初頭の竪穴住居一覧 …… 17

1　前　　言

1．はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市 JCT ～亀山西 JCT にかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成 20 年度から実施している。

平成 20 年度から平成 26 年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ[①]、Ⅱ[②]、Ⅲ[③]、Ⅳ[④]および同Ⅴ[⑤]として、また、平成 20 年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と、平成 21 年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第３次・伊坂城跡第５次調査の結果については、発掘調査報告[⑥]を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路事業の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

2．平成 27 年度の調査

（1）現地調査

昨年度までの３年間は、年間合計約５万㎡という広大な発掘調査面積を、当埋蔵文化財センター職員全体の約 1/3 を四日市整理所に駐在させ、対応してきた。今年度は、若干発掘調査のピークは過ぎ、職員数が減る中、年度当初の計画としては、北山Ｃ遺跡、小牧南遺跡、鈴山遺跡、高ノ瀬遺跡、小社遺跡、釜垣内遺跡の６遺跡の二次調査を計 22,744㎡、北山Ｃ遺跡、高ノ瀬遺跡の２遺跡の一次調査を計 1,052㎡、合計 23,796㎡の発掘調査面積が予定された。

昨年度までは、四日市 JCT ～新四日市 JCT 間の供用開始時期が迫る中、四日市工事区管内の発掘調査の優先度が高かったが、今年度は、概ね、菰野工事区、菰野四日市工事区、鈴鹿亀山工事区管内へと調査する遺跡が移った。しかし、昨年度同様に、調査区周辺では、建設工事が急ピッチで行われており、また、調査終了時期が近接していたため、年３回の全体調整の定例会の他に、適宜、工事計画との詳細な調整協議を現地で行った。

結果的には、二次調査は計 18,620㎡、一次調査は計 1,064㎡、合計 19,684㎡の発掘調査を行った。

（2）室内調査

今年度も現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。その中で、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成を実施した。

3．その他

調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに、現地説明会を 10 月 31 日に北山Ｃ遺跡で、11 月１日に釜垣内遺跡で、11 月７日に鈴山遺跡で、11 月 28 日に小牧南遺跡で実施した。特に、鈴山遺跡については、校区の小学校や地元の団体からの遺跡見学の依頼に対応した。また、地元団体や高等学校への出前講座も行った。さらに、イオンモール東員で、11 月 29 日に新名神高速道路・東海環状自動車道開通に伴うイベントが行われ、筆ヶ崎古墳群出土の遺物と写真パネルの展示にも参加した。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター 2010『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』

② 三重県埋蔵文化財センター 2012『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』

③ 三重県埋蔵文化財センター 2013『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』

④ 三重県埋蔵文化財センター 2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』

⑤ 三重県埋蔵文化財センター 2015『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅴ』

⑥ 三重県埋蔵文化財センター 2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』･三重県埋蔵文化財センター 2012『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』

No	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積	一次調査後施工可面積	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	終了合計面積	未調査面積	備考
					一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了	一次調査 二次調査 調査終了			
1	伊坂遺跡・伊坂窯跡（いさかいせき・いさかがまあと）	四日市市伊坂町	3,950	0	42 558 800	2,870 3,150							42 3,428 3,950	0	調査終了
2	伊坂城跡（いさかじょうあと）	四日市市伊坂町	25,000	0		4,490 6,000	990 2,500			589 4,100	10,009 12,400		16,078 25,000	0	調査終了
3	北山C遺跡（きたやま　いせき）	四日市市西大鐘町・桑名市志知	22,000	1,235				600	4,350 4,350	1,000 4,945 4,945	9,047 9,047	216 2,423 2,423	1,816 20,765 20,765	0	路線内は26年度に調査終了 27年度の216㎡・2,423㎡は、 工事用道路部分・28年度以降工事用道路二次調査あり
4	野中遺跡（のなかいせき）	四日市市北山町	15,500	15,500					500	500			1,000	0	調査終了
5	黒土遺跡（くろぼくいせき）	四日市市北山町	11,000	11,000			580	380					960	0	調査終了
6	北山A遺跡（きたやま　いせき）	四日市市北山町	19,000	5,300			950 100 100	500 3,760 3,760	4,130 4,130	4,370 4,920	756 790		1,450 13,116 13,700	0	調査終了
7	中野山遺跡（なかのやまいせき）	四日市市北山町	43,000	1,155			1,530	880 6,400 6,400	10,635 10,712	18,485 17,833	6,173 6,900		2,410 41,693 41,845	0	調査終了
8	筆ヶ崎古墳群（ふでがさきこふんぐん）	四日市市小牧町	15,000	0				560 750 750	9,100 9,100	5,319 5,150			560 15,169 15,000	0	調査終了
9	北山城跡・居林遺跡（きたやまじょうあと・いばやしいせき）	四日市市北山町	20,864	0				630	6,426 6,426	6,438 6,438	6,948 8,000		630 19,812 20,864	0	調査終了
10	居林古墳群（いばやしこふんぐん）	四日市市北山町	—	—									0 0 0	—	北山城跡対象範囲に含まれる。
11	小牧南遺跡（こまきみなみいせき）	四日市市小牧町	20,300	6,459				460	800 32 165	72 7,371 7,371	165	5,935 6,305	1,497 13,338 13,841	0	調査終了
12	中野平古遺跡（なかのひらこいせき）	四日市市中野町	7,000	7,000						940			940	0	調査終了
13	野添御飯山古墳（のぞえごはんやまこふん）	菰野町川北	1,000	1,000					200				200	0	調査終了
14	椋ノ木遺跡（むくのきいせき）	菰野町池底	16,500	15,650						930	360 791 850		1,290 791 850	0	調査終了
15	大久保遺跡（おおくぼいせき）	菰野町潤田	12,000	12,000						800			800	0	調査終了
16	鈴山遺跡（すずやまいせき）	菰野町音羽	8,000	1,700						980		6,256 6,300	980 6,256 6,300	0	路線内調査終了・ 新調整池計画（1,600㎡）あり
17	大松遺跡（おおまついせき）	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180				180	0	調査終了
18	高ノ瀬遺跡（たかせいせき）	鈴鹿市山本町	33,600	33,600					1,580		769	848	3,197	0	路線内調査終了・ 鈴鹿スマートIC計画（2,800㎡）あり
19	折子遺跡（おりこいせき）	鈴鹿市山本町	13,500	13,500					800				800	0	路線内調査終了・ 鈴鹿スマートIC計画（5,700㎡）あり
20	東荒野遺跡（ひがしあらのいせき）	鈴鹿市山本町	4,900	4,900					500				500	0	調査終了
21	小社遺跡（こやしろいせき）	鈴鹿市小社町	12,000	8,025				1,020	400 1,573 1,573		2,073 2,073	362 329	1,420 4,008 3,975	0	調査終了
22	釜垣内遺跡（かまがいといせき）	鈴鹿市小岐須町	30,000	14,490				2,300	200 7,014 8,500	3,031 3,200		3,644 3,810	2,500 13,689 15,510	0	調査終了
年度別調査　合計面積			336,314	154,714	42 558 800	0 7,360 9,150	3,060 1,090 2,600	7,330 10,910 10,910	5,160 43,260 44,956	5,222 50,548 53,957	1,294 35,797 40,060	1,064 18,620 19,167	23,172 168,143 181,600	0	H28．3．31現在 単位：㎡

表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

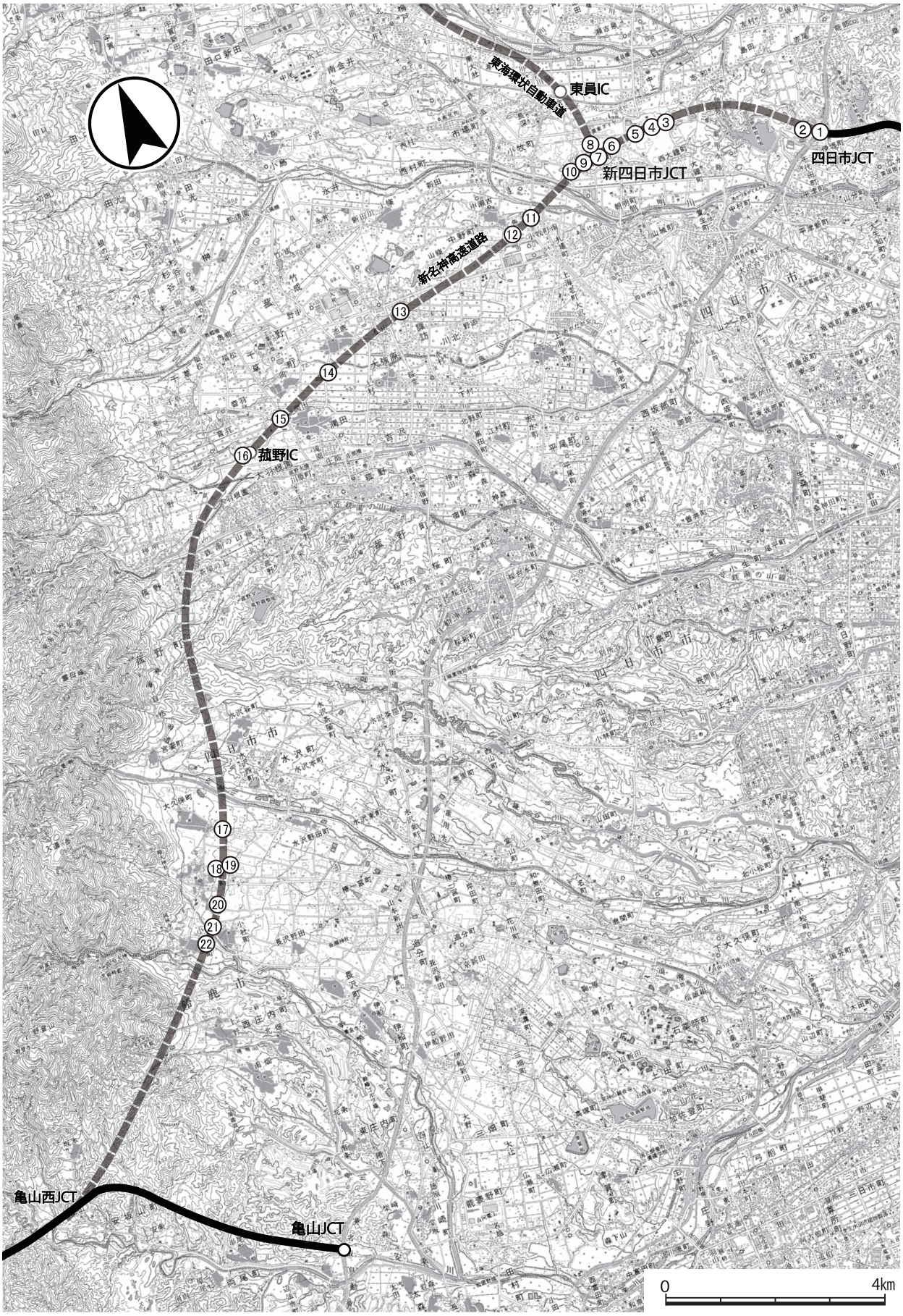


図１　遺跡位置図（1:100,000）

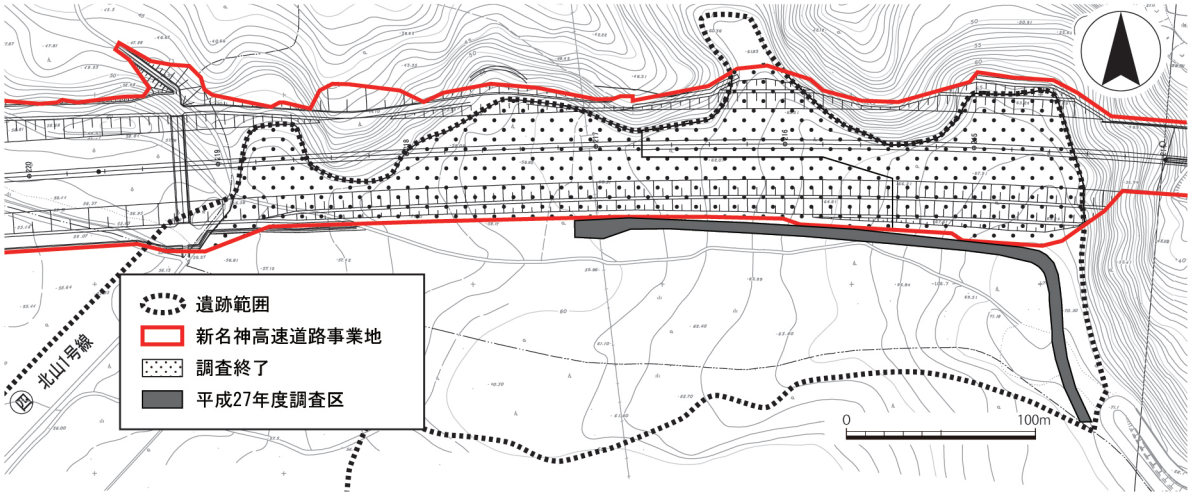


図２　北山Ｃ遺跡調査区位置図（1:4,000）

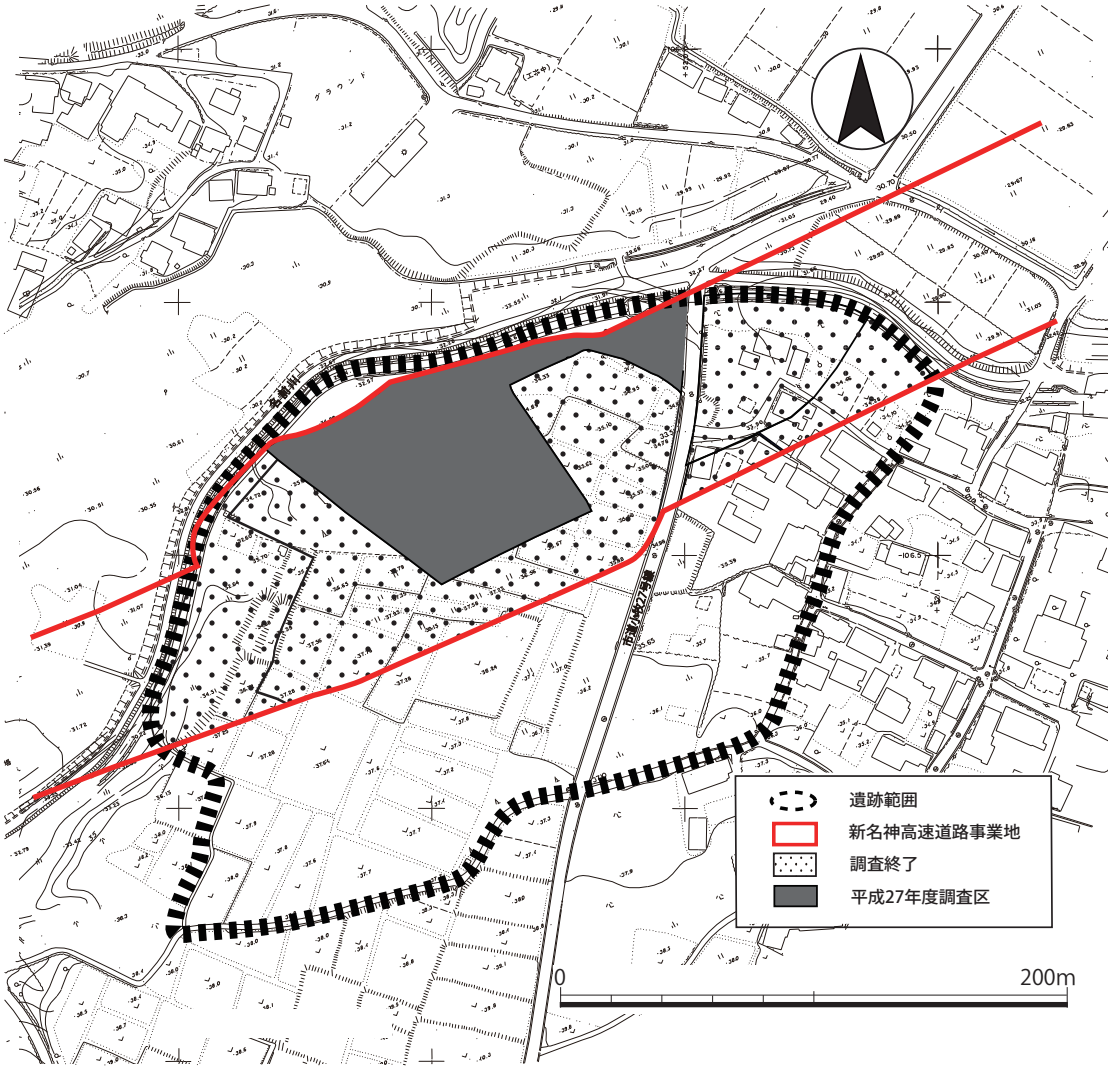


図３　小牧南遺跡調査区位置図（1:3,000）

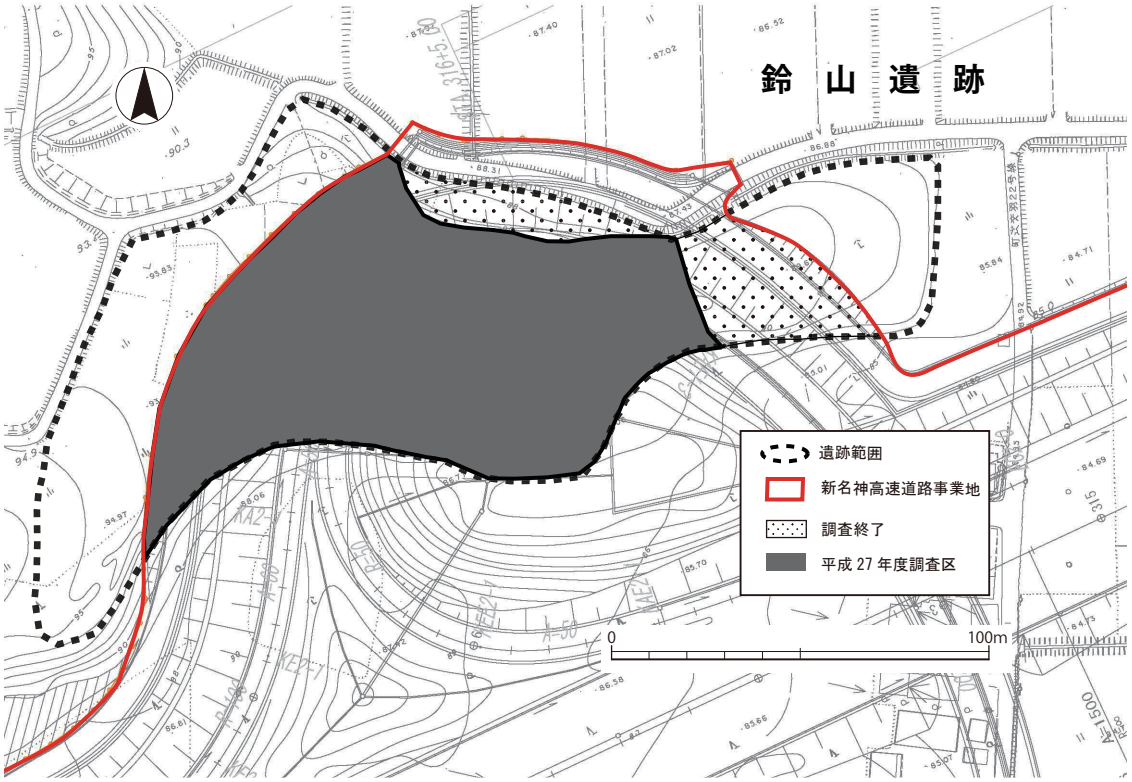


図４　鈴山遺跡調査区位置図（1:2, 000）

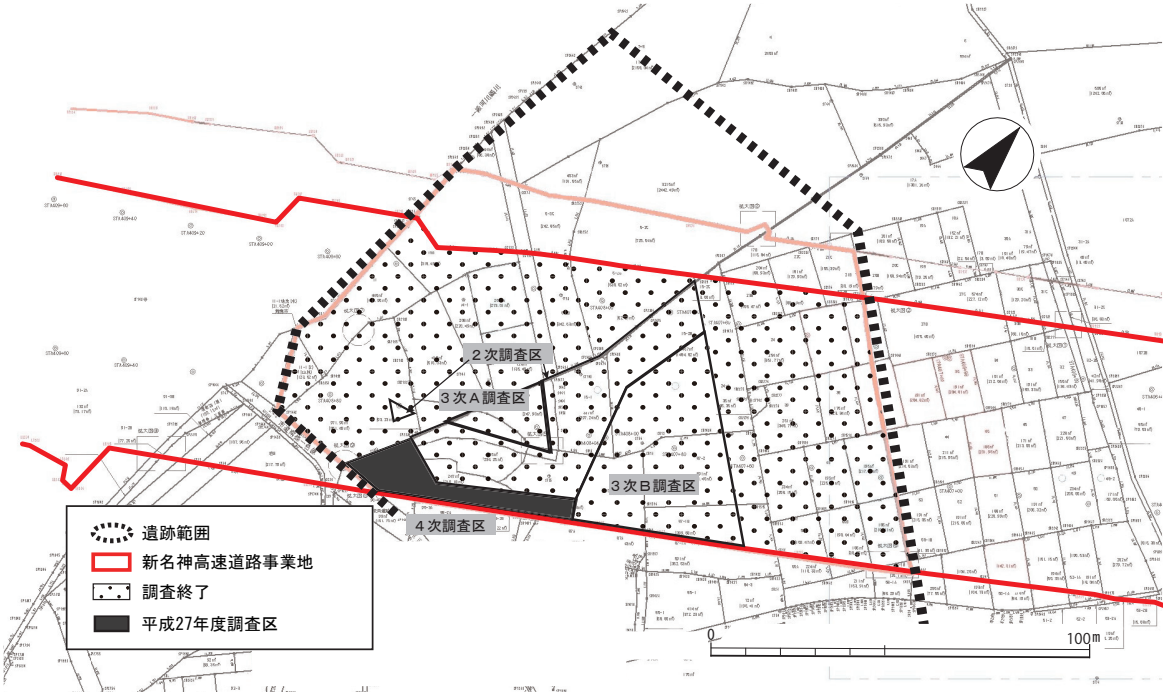


図５　小社遺跡調査区位置図（1:2, 000）

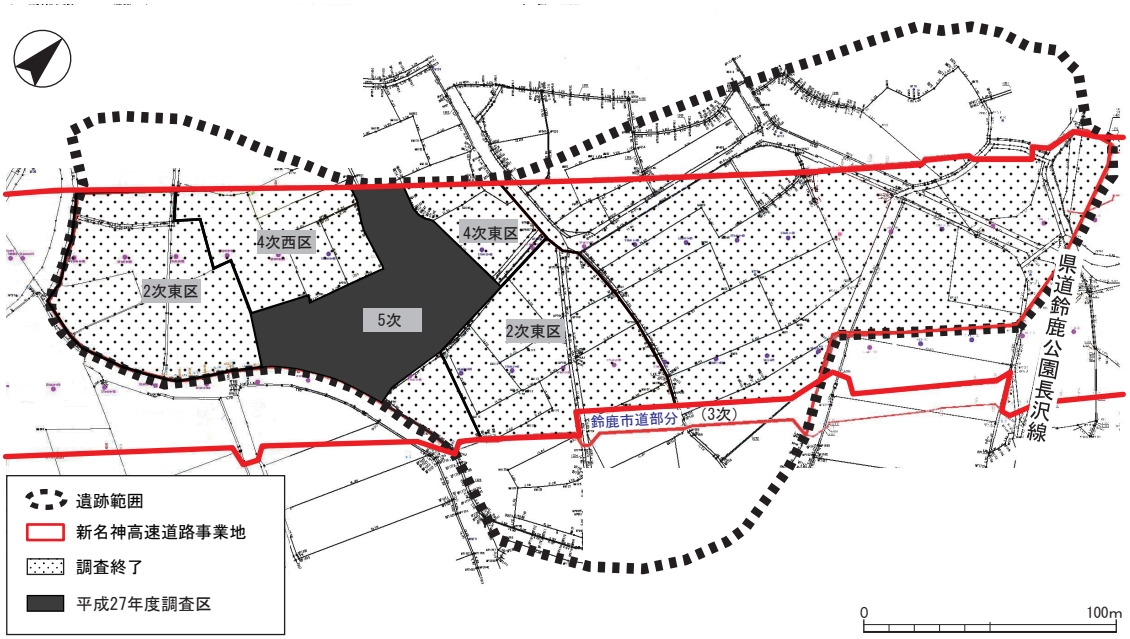


図６　釜垣内遺跡調査区位置図（1:3,000）

内　容	所在地・会場	開　催　年　月　日	参加人数
八郷の歴史探検隊　夏休み自由研究	伊坂貯水池・四日市整理所	平成 27（2015）年 7 月 30 日（木）	24 名
音羽　歴史を発掘する会　遺跡見学	鈴山遺跡	平成 27（2015）年 10 月 24 日（土）	54 名
千種地区　公民館　バスツアー　遺跡見学	鈴山遺跡	平成 27（2015）年 10 月 28 日（水）	49 名
北山Ｃ遺跡（第６次）　現地説明会	桑名市志知	平成 27（2015）年 10 月 31 日（土）	140 名
釜垣内遺跡（第５次）　現地説明会	鈴鹿市小岐須町	平成 27（2015）年 11 月 1 日（日）	119 名
千種小学校　放課後こども教室　遺跡見学	鈴山遺跡	平成 27（2015）年 11 月 4 日（水）	35 名
鈴山遺跡（第２次）　現地説明会	三重郡菰野町	平成 27（2015）年 11 月 7 日（土）	310 名
小牧南遺跡（第３次）　現地説明会	四日市市小牧町	平成 27（2015）年 11 月 28 日（土）	175 名
イオンモール東員　開通行事　遺物展示	イオンモール東員	平成 27（2015）年 11 月 29 日（日）	359 名
千種小学校　５年生　遺跡見学	鈴山遺跡	平成 27（2015）年 12 月 1 日（火）	51 名
千種小学校　２年生　遺跡見学	鈴山遺跡	平成 27（2015）年 12 月 3 日（木）	58 名
北星高校　出前講座	北星高校	平成 27（2015）年 12 月 20 日（日）	29 名
八郷地区　歴史探検隊　出前講座	八郷地区市民センター	平成 28（2016）年 1 月 25 日（月）	10 名
保々歴史を語る会　出前講座	保々地区市民センター	平成 28（2016）年 3 月 19 日（土）	19 名

表２　普及公開活動一覧

写真１　八郷の歴史探検隊出前講座

写真２　北山Ｃ遺跡現地説明会

写真３　釜垣内遺跡現地説明会

写真４　鈴山遺跡見学会

写真５　イオンモール東員遺物展示

写真６　北星高校出前講座

2　北山Ｃ遺跡（第６次）・西山古墳群

１．はじめに

北山Ｃ遺跡は員弁川と朝明川との間、標高約60ｍの台地上に位置し、桑名市・東員町・四日市市にまたがる広大な遺跡である。

従来は弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と考えられてきたが、平成24年度の第２次調査において古墳10基が確認され、古墳時代中期の古墳群でもあることが判明した。さらに、遺跡は東方に広がるものと判断し、「周知の埋蔵文化財の範囲変更」を三重県教育委員会に通知した。

今回の調査区は、第２～５次調査区の南側に隣接する平坦地を対象とし、長さが約350ｍ、幅が平均７ｍと、細長い。面積は2,423㎡で、期間は平成27年６月５日～平成27年12月11日である。

２．遺構と遺物

古墳14基と墓（土壙墓・木棺墓）２基・掘立柱建物１棟・土坑などを確認した。なお、古墳は西山古墳群に属するため、第３～６次調査で見つかった古墳に「西山○号墳」という名称を11号墳～55号墳まで付与した。（第２次調査の古墳10基は平成24年度に付与）

（１）古墳

14基を調査した。いずれも墳丘部分は削平されており、大半は周溝を残すのみであったが、11号墳の中央で主体部（ＳＫ303）を確認した。

古墳の形状は、方墳11基、円墳３基であった。西山古墳群全体でも、方墳は55基中46基を占め、圧倒的に多い。また、円墳は古墳群の西部に偏在する傾向が見られる。

古墳群の造営は、周溝から出土した須恵器・土師器の観察から、古墳時代中期頃と考えられる。

以下、主な古墳について記述する。

46号墳（ＳＤ301）　大部分が調査区外のため四半分ほどの北東部を調査したのみであるが、11号墳とほぼ同規模と推測される古墳である。周溝の内側の形状から円墳と判断した。調査区の西壁際で、周溝内に古墳造営時に意図的に掘り残したものと考えられる土橋状の高まりを確認した。遺物としては、周溝の底から５世紀の須恵器が出土した。

11号墳（ＳＤ67）・ＳＫ303　第３次調査での北半部と今回の南半部の調査により、古墳のほぼ全体を確認した。規模は周溝を含めて、直径が約16.5ｍ、周溝は幅1.6～3.0ｍ、深さ30～45cmの円墳である。飛鳥時代の掘立柱建物（ＳＢ70）と土坑（ＳＫ302）が近接する周溝からは、古墳に伴う土器以外に飛鳥時代の土器が大量に出土した。飛鳥時代には埋まり切っていなかった周溝に、土器を遺棄したと考えられる。

ＳＫ303は、古墳群で唯一円墳から検出された主体部である。規模は長さ3.1×幅0.6ｍ、深さ20cmである。副葬品は出土しなかった。

写真７　西山46号墳（東から）

写真８　西山11号墳・ＳＫ303（東から）

47 号墳（ＳＤ 304）　大部分が調査区外であるため、古墳の北部を調査したのみである。規模は周溝を含めて一辺 17.8 m、周溝は幅 2.0 ～ 3.0 m、深さ 17 ～ 33cm で、大規模な部類に入る方墳である。周溝からは、土師器と須恵器が比較的多く出土した。

55 号墳（ＳＤ 317）　東西の両端が調査区外であるがほぼ全体が推測される円墳である。規模は、周溝を含めて直径 18.2 m、周溝は幅 1.8 ～ 2.2 m、深さ 25 ～ 75cm である。方墳ばかりの古墳群東部で確認された唯一の円墳である。

（２）墓（土壙墓・木棺墓）

古墳群の東部で確認した２基（ＳＫ 314・315）について記述する。

ＳＫ 314　長さ 1.5 m × 幅 0.8 m、深さ 22cm の墓である。これまでに古墳群で発見された墓の長さの平均が２m弱であるので、比較的小さい墓である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ 315　長さ 1.2 m × 幅 0.8 m、深さ 11cm の墓である。これまでに古墳群で発見された中で２番目に小さい墓（１番小さい墓は第５次調査ＳＫ 207 の 1.16 m）である。棺を固定するためとみられる白っぽい粘土が検出されたが、遺物は出土しなかった。

（３）その他の遺構

ＳＢ 70　第３次調査において北半部の柱穴が確認されていたが、今回の調査結果と合わせて、３×２間の掘立柱建物であることが判明した。時期が特定できない土師器の小片が１点出土した。第２・３次調査で検出した飛鳥時代の竪穴住居と方向を揃えることから、他の掘立柱建物と同様に飛鳥時代の遺構であると考えられる。

写真 12　ＳＫ 315（北から）

写真９　西山 47 号墳（東から）

写真 10　西山 55 号墳（北から）

写真 11　西山 55 号墳北溝土層（北東から）

写真 13　ＳＢ 70（南東から）

ＳＫ 318　平面形はやや楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 100cm の土坑である。土坑の底中央に直径 20cm、深さ 30cm 程の小さな穴がある。ＳＫ 319 も一部調査区外であるが、ほぼ同様の形状である。遺物は伴っていないが、縄文時代の遺構と分析された第５次調査の土坑３基と類似していることから、縄文時代の落とし穴と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では 14 基の古墳を調査した。これで、遺跡内で確認された古墳はあわせて 55 基となり、数の上では石薬師東古墳群の 66 基に次ぐ、北勢地方屈指の規模となる古墳群であることが明らかとなった。周溝が調査区の南側へ延びる古墳があり、かつ平坦な地形が広がっていることから、これまでの調査区の南側にもさらに古墳が存在することが想定される。

これまでに埋葬施設が残っていた古墳は２基の方墳だけであったが、今回の調査で円墳（11 号墳）の埋葬施設も調査することができた。その成果として、円墳と方墳のどちらも細長く掘った穴に直接、木棺を安置して埋める木棺直葬であることがわかった。

写真 14　ＳＫ 318（南東から）

写真 15　ＳＫ 319（東から）

写真 16　**調査区風景**（東から）

写真 17　調査区西部（北東上空から）

写真 18　調査区中央部（西から）

写真 19　調査区東部（北上空から）

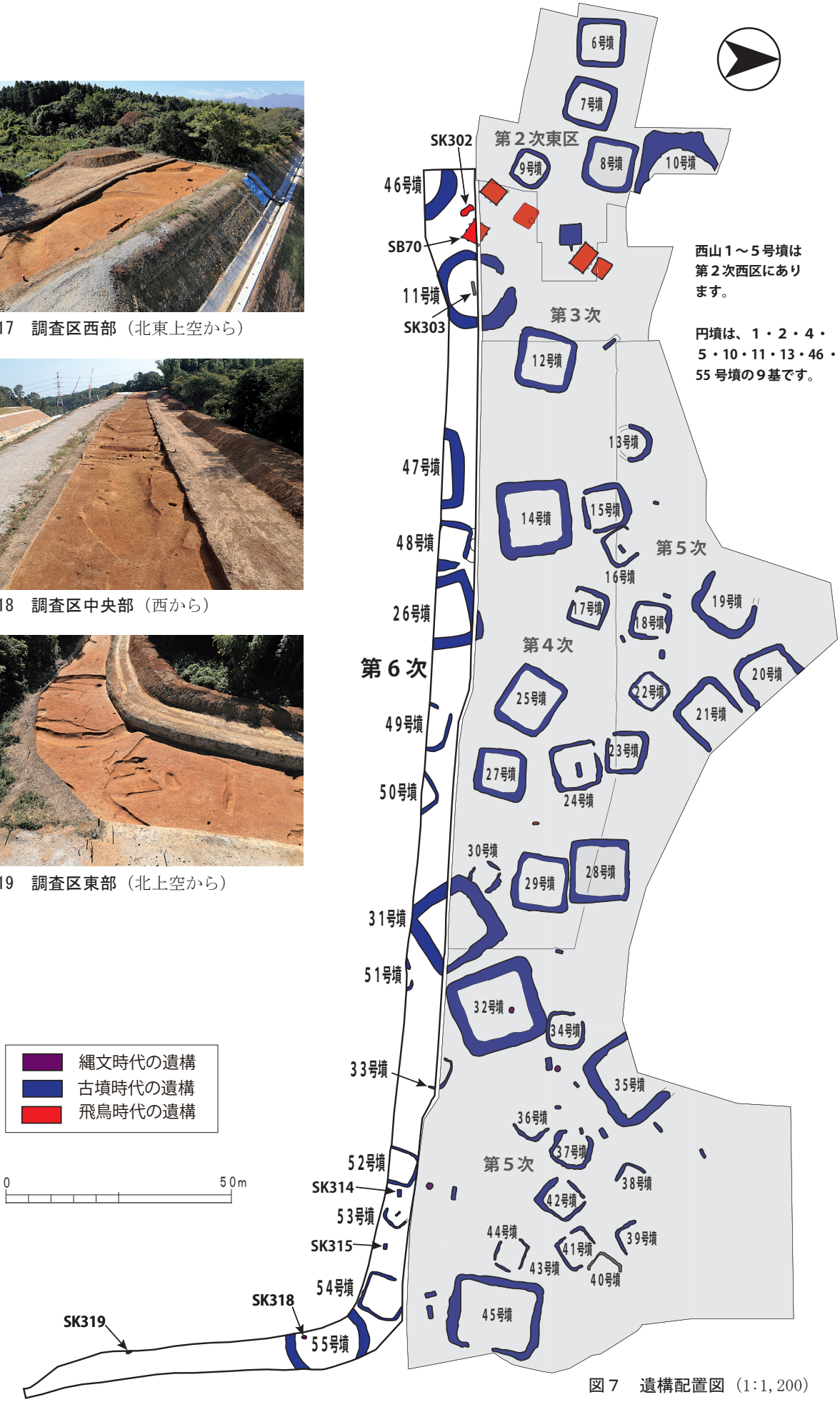


図７　遺構配置図（1:1, 200）

3　小牧南遺跡（第３次）

１．はじめに

小牧南遺跡は、四日市市小牧町字風呂屋に所在する。遺跡は朝明川中流右岸、鈴鹿山脈東麓から続く菰野台地①の東端付近に位置し、標高 30 m程度の台地裾部の北向きの緩斜面に立地している。

遺跡の北側には朝明川の支流である名前川が台地の裾に沿って東流しており、朝明川のつくり出した沖積地と小牧南遺跡のある台地とを区分している（写真 20）。

発掘調査は新名神高速道路の建設に伴って、平成 23 年度から行われており、これまでに、縄文時代中期の掘立柱建物や竪穴住居、古墳時代初頭の竪穴住居等が多数確認されている。今回は平成 25 年度の第２次調査で遺構が密集してみつかった地区からみて、北西側にあたる部分を中心に調査を行った（図８）。調査期間は、平成 27 年６月５日～平成 28 年１月 18 日まで、調査面積は 5,935㎡である。

２．縄文時代中期

（１）遺構

この時期の遺構として新たに竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、陥し穴②２基を確認した。整理途中であるが、概ね、東海地方の編年で島崎Ⅲ式・山ノ神Ⅰ式前後③に併行する土器が出土している。前回調査で確認されている遺構と合わせると、竪穴住居は 11 棟、掘立柱建物は８棟、陥し穴は３基となる。

竪穴住居　ＳＨ 335・344・355・360 の４棟を新たに確認した（写真 21 ～ 24）。ＳＨ 335･344･355 は、遺構の集中している調査区の中央部付近で検出されたが、ＳＨ 360 のみ単独で調査区の北西部で検出されている（図８）。

各住居とも削平がすすんでいるため、規模や平面形は壁周溝や炉・主柱穴の配置等をもとに推測する他ないが、いずれの住居も大きさは約４～５m四方で、平面形は、かなり丸みを帯びた隅丸方形と考え

写真 20　調査区全景（東上空から）

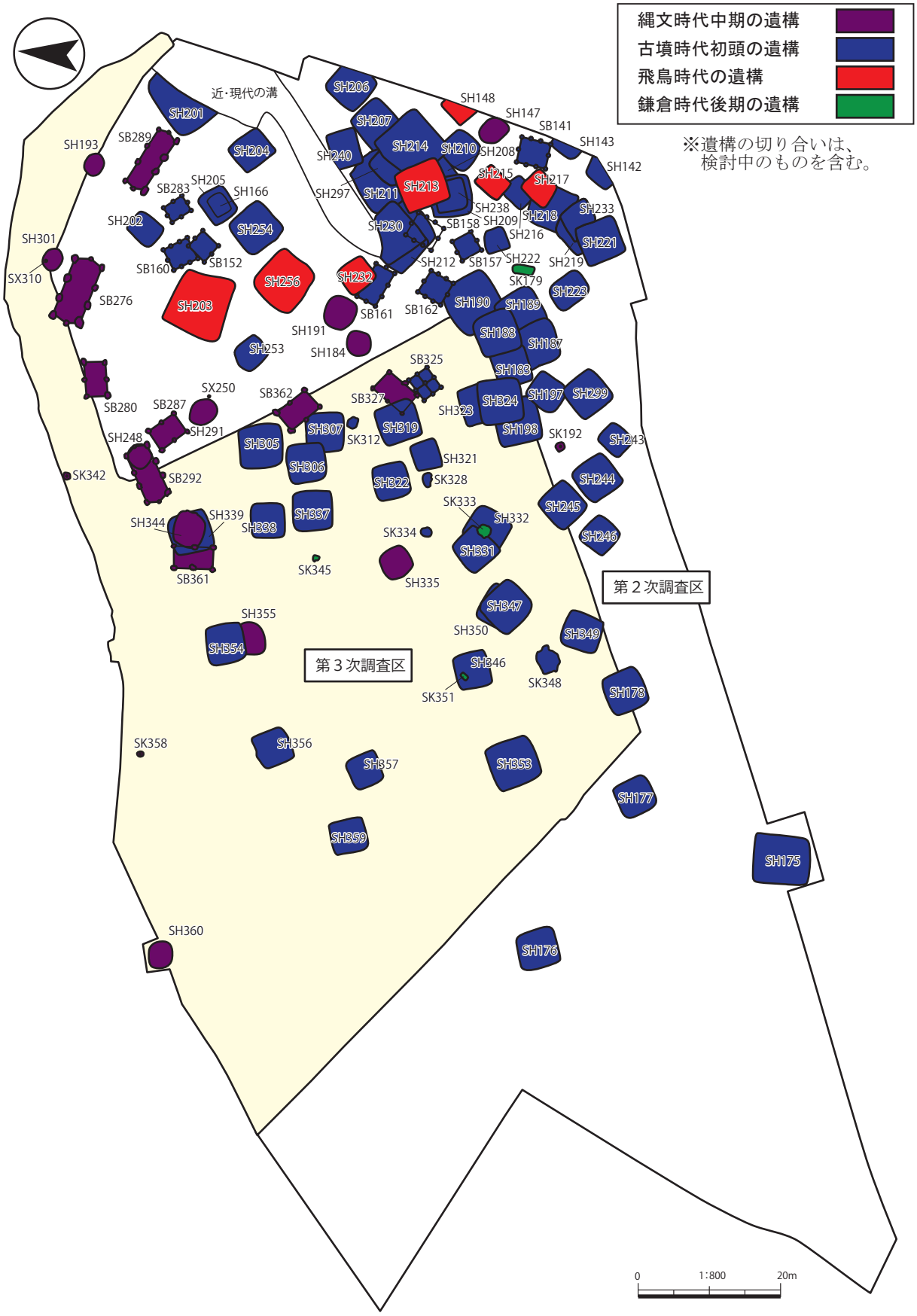


図８　遺構配置図（1:800）

写真 21　ＳＨ 335（北西から）

写真 22　ＳＨ 344（南から）※ＳＨ 339 が重複

写真 23　ＳＨ 355 と石囲炉（南東から）

写真 24　ＳＨ 360（南東から）

られる。

壁周溝は、最も遺存状態の良いＳＨ 335 では、ほぼ全周で検出された。それ以外の住居では４辺ある壁のうちの１辺（ＳＨ 355・360）、または向かい合う２辺（ＳＨ 344）で検出されている。壁周溝の底部には凹凸があり、不規則に小ピットが検出されるものもあった。また、いずれの住居でも、壁周溝の１辺の中央部付近にピットや掘り込みがみられた。これは踏み段の痕跡④や、出入口付近でみつかることの多い埋甕の抜き取り痕⑤などと推測されているもので、いずれも出入口に関連する造作の痕跡である。このような壁周溝中央部付近のピットは、県内では他に菰野町鈴山遺跡のＳＨ 50 に検出例があり⑥、岐阜県では塚原遺跡⑦・炉畑遺跡⑧・宮之脇遺跡⑨等で多数報告されている。

壁周溝は、ＳＨ 335・355・360 では部分的に二重になっており、ＳＨ 335 では溝が１本に見える部分でも２本の溝の重複であることが確認できた。また、ＳＨ 335 の土層断面では、壁周溝は内側が古く、外側が新しいことが確認できた。ＳＨ 335 では部分的な拡張を伴う建て替えが行われたことが窺える。

炉はいずれの住居でも中央からやや外れた位置で検出されている。前述の壁周溝中央部のピットをもとに出入口を推定すると、炉は、いずれの住居でも出入口からみて、中央より奥方に作られていることになり、出入口から中央部付近までの空間を広くとろうとする意図が窺える。

石囲炉　ＳＨ 355 では石囲炉が完存していた（写真 23）。炉の平面形は、径 80cm程度の円形を呈し、深さは 16cmである。炉穴側面には 20 ～ 30cm程度の自然礫 10 個が貼付され、礫間の凹み３ヵ所には、拳大の小礫がはめ込まれていた。炉の底面と礫の側面は強く被熱し、赤変が顕著に確認できた（写真 25）。なお、検出時には、炉内は炭化物を多量に含む灰で満たされており、中央には径９cm程度のチャートの円礫が存在した（写真 26）。炉の外部から礫が石囲いを乗り越えて自然に転がり込むことは考えにくいため、炉の廃絶の際に意図的に置かれたものと思われる。

埋甕炉　埋甕炉（ＳＸ 310）は、その出土位置から、前回の調査で一部が確認されている竪穴住居（ＳＨ 301）に伴うものと考えられる。深鉢の体部

上半の筒状部分を地中に埋めて炉として使用している（写真27）。使用されている深鉢は全体的に被熱で脆くなっていた。取り上げの際に炉内部の土層断面を確認したところ、炉の底部には土器片が敷きつめられており、その上は厚い焼土層となっていた（写真28）。焼土層の上面は特に硬く焼き締まっており、底部に土器片が敷かれた後、土や焼土塊などが投入され、その上で繰り返し燃焼が行われている様子が感じられた。

掘立柱建物　ＳＢ327（写真29）・361・362の３棟を新たに確認した。また、調査区外に延びるため前回調査では確認できなかったＳＢ276・280・292の残りの柱穴もほぼ想定通りの位置から検出され、これら３棟のプランも判明した（図８）。

前回調査同様、桁行の柱間寸法など、北勢地域の弥生時代以降の掘立柱建物には認められない特徴[10]を有することや、柱穴からの出土遺物が縄文中期の土器や石器に限られており、後世の遺物の混入が全くみられないことなどから、今回確認できた３棟もこの時期の遺構と判断した。

今回確認できた掘立柱建物は、いずれも桁行２間

写真25　石囲炉（南東から）

写真26　石囲炉　検出時（南から）

写真27　ＳＸ310埋甕炉（南から）

写真28　ＳＸ310埋甕炉の断面（南から）

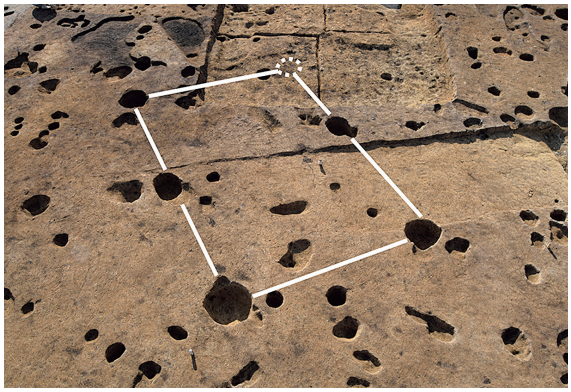


写真29　ＳＢ327（東から）

写真30　ＳＫ342陥し穴（北から）

（5.2 ～ 5.3 m、柱間は 2.6 ～ 2.7 m の等間）×梁行１間（3.1 ～ 3.4 m）に収まる規模である[11]。

３間×２間の大型の掘立柱建物（ＳＢ 276・289・292）に比べると、２間×１間の小型の掘立柱建物（ＳＢ 280・287・327・361・362）は、集落のやや西側から南側に分布している。

陥し穴　調査区北部の壁ぎわで新たに２基（ＳＫ 342・358）を確認した（図８）。前回調査で確認されているものと合わせると陥し穴は３基となる。

ＳＫ 342 は、平面形はほぼ円形を呈し、径 1.1 m、深さ 1.1 m、底面の中央に径 20㎝、深さ 15㎝の小ピットを伴う（写真 30）。遺構の形態は縄文時代の陥し穴として報告されている他の類例と矛盾しないものの、詳細な時期決定については、採取した炭化物の分析結果を待ちたい。

（２）遺物

前回の調査に比べると、出土した遺物は少なく、土器も小片がほとんどで、無文のものが多い。

整理途中であるため確定的なことは言えないが、先にも書いたとおり、島崎Ⅲ式～山ノ神Ⅰ式前後[12]に併行する土器が主体である（写真 31）。

石器は、石鏃・掻器・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿など[13]、数は少ないものの多種にわたる（写真 32）。

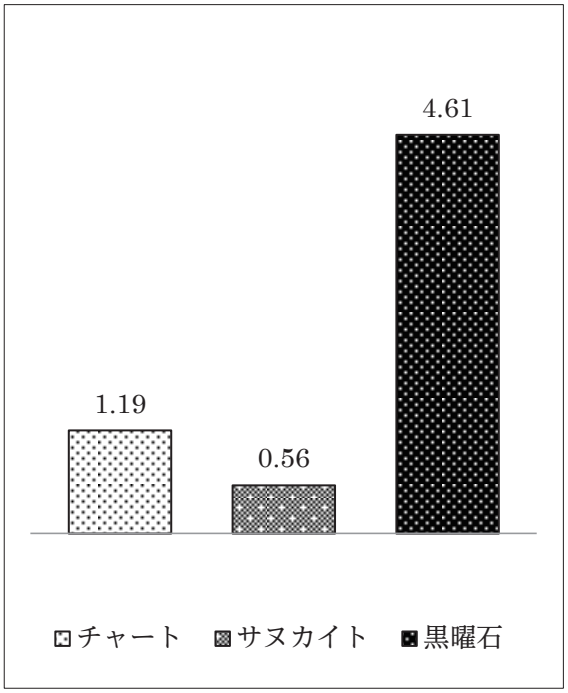


図９　ＳＨ 355 石囲炉出土剥片重量（単位ｇ）

石材は剥片も含め、黒曜石・下呂石・サヌカイト・チャート・ハイアロクラスタイト・砂岩などがあり、在地で入手可能なものだけでなく、遠方でしか産出しないものも多く含まれている。

主な遺構の埋土は持ち帰り、篩いがけを行っているが、ＳＨ 355 内の石囲炉では、黒曜石の剥片（写真 33）がサヌカイトなど他の石材の剥片を圧倒している（図９）。整理途中であるが、他の遺構から出土している剥片も黒曜石の割合が多いように感じられ、サヌカイトが主体となることが多いこれまでの県内例[14]とは異なる傾向を示す可能性がある。

写真 31　竪穴住居出土縄文土器

写真 32　石鏃・掻器・打製石斧・磨製石斧

写真 33　ＳＨ 355 石囲炉出土黒曜石剥片

３．古墳時代初頭

（１） 遺構

この時期の遺構として新たに竪穴住居21棟、掘立柱建物１棟、土坑４基を確認した。遺構は調査区の南東部に偏在しており、西にいくほど疎らになる。

竪穴住居　平面形はいずれも隅丸方形である。規模は最小のもので4.0 × 4.2 m、最大のもので7.2 × 7.2 mとばらつきがあるものの、概ね５～６m前後のものが多数を占める。主柱穴は４基で、住居の隅に貯蔵穴を伴うものがほとんどであるが、4.4 m以下の小型のもの（ＳＨ321・357）には、主柱穴といえる柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。また10棟で炉跡を、17棟で壁周溝を確認したほか、９棟で貼床を確認できた。貼床は、平面的には住居の中央部を残して周囲をコの字形やロの字形に５～20㎝程度掘り下げて掘形とし、そこに改めて土を入れて突き固めてつくられていた。

各竪穴住居からは多数の土器[15]が出土しているが、今回、試みにＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕）が出土した竪穴住居について検討を行ったところ、Ｓ字甕Ａ類のみを伴う竪穴住居（ＳＨ190・305・323・331）、Ａ類とＢ類を伴う竪穴住居（ＳＨ245・322・338）、Ｂ類のみを伴う竪穴住居（ＳＨ324・347・353）に分類できた。整理途中であるため、さらに詳細な検討が必要であるが、これらの竪穴住居の分布をみると、それぞれ15～20 mの間隔をおいて点在しており、時期を同じくする竪穴住居は、ある程度一定の間隔で築造されていた可能性が考えられる。

ＳＨ324　調査区南東に位置する竪穴住居である。住居内の北東隅の床面から土器がまとまって出土した（写真34）。ＳＨ183・198・323と重複しているが、ＳＨ198・323については、土層断面の観察により、ＳＨ324が後出であることが確認できた。これはＳＨ324からＳ字甕Ｂ類（図11の10）、ＳＨ323からＳ字甕Ａ類口縁が出土していることとも矛盾しない。残るＳＨ183との新旧関係については、平面・断面ともに切り合いは不明瞭であったが、ＳＨ324より浅いＳＨ183の床面に相当する硬化面などは確認できなかった。この点を勘案するとＳＨ324が後出となるが、今後さらに詳細な検討を行う必要がある。

ＳＨ332　調査区南東に位置する竪穴住居である。北側は重複するＳＨ331により削平されている（写真35）。東壁から南壁にかけて壁周溝が２重になっており、ほぼ同じ位置で建て替えが行われたことが想定できる。貯蔵穴は当初、南西隅で１基検出したが、南東隅の貼床下からも１基みつかった。建て替えに伴い改装が行われた様子が窺える。

ＳＨ338　調査区東に位置する竪穴住居である（写真36）。主柱穴は４基、炉跡は確認できなかったが、南西隅で貯蔵穴を確認した。西壁ぎわ中央の床面から径40㎝程度の石が出土した。石の表面の一部には磨面が確認できた。大きさや出土位置から作業台や踏み台などとしても使用された可能性が考えられる。

住居底面には貼床が認められ、その下の掘形から、形や大きさの揃った凹凸が検出された。竪穴を掘削する際の道具の痕跡と思われる。

遺構名	規模（m）	炉	貯蔵穴
SH305	6.1×6.2	西	南東隅・南西隅
SH306	5.7×5.0	不明	南東隅
SH307	5.5×5.5	西	南西隅
SH319	5.6×5.8	不明	南西隅
SH321	4.0×4.2	東	無し
SH322	4.0以上×5.2	東・西２	南東隅
SH323	3.2以上×5.5	不明	南東隅
SH324	6.4×6.5	不明	南東隅
SH331	5.4×5.4	不明	北東隅
SH332	5.0以上×5.8	不明	北東隅・南東隅
SH337	5.6×5.7以上	不明	南・南西隅
SH338	4.9×5.0	不明	南西隅
SH339	5.7×5.8	不明	南西隅
SH346	4.8×5.0	西２	南西隅
SH347	6.0×5.8	北	南東隅
SH349	5.0×5.4	南２・西	南東隅
SH350	3.2以上×5.6	不明	南西隅
SH353	6.8×6.6	不明	南東隅
SH354	5.4×5.4以上	不明	南西隅
SH356	4.8×4.8	不明	南辺
SH357	4.4×4.4	不明	無し
SH359	5.0×5.0以上	不明	南西隅
SH178	5.6×5.6	不明	南西隅
SH183	5.0×5.2以上	中央？	無し
SH188	6.0×6.0	東・西	東
SH190	7.2×7.2	東・西	無し
SH198	6.2×6.4	不明	南西隅
SH245	5.4×5.4	不明	南東隅

表３　古墳時代初頭の竪穴住居一覧

写真 34　ＳＨ 324（西から）

写真 35　ＳＨ 332（南から）

写真 36　ＳＨ 338（北から）

写真 37　ＳＢ 325（北から）

写真 38　ＳＫ 334（東から）

ＳＢ 325　調査区南東部で検出した掘立柱建物である。２間（3.2 m）×２間（3.6 m）の総柱建物で柱間は 1.6 ～ 1.8 mである（写真 37）。柱穴からは土師器片が出土しているが、いずれも小片であるため、時期の特定はさらに詳細な検討が必要である。

（２）遺物

竪穴住居と土坑を中心に、壺・器台・高杯・甕・甑などが出土し、良好な一括資料となるものがみられた。まだ整理段階であるが、いわゆるＳ字甕は、Ａ～Ｃ類までがあり、なかでもＡ類新段階からＢ類の出土数がもっとも多い。また、Ａ類古段階のものが新段階のものに混在して出土する場合もあった。

ＳＨ 324 出土遺物（図 11）　竪穴住居北東隅付近から集中して出土したものである（図 10）。

１～３は壺。１は口縁部がやや内弯し、調整はハケメで留め、ケズリは施されていない。２は、口縁部は欠損するものの、おそらく大きく開き、弱い受口を呈するものと思われる。外面は全面赤彩、頸部内面にも赤彩が残ることから、口縁部内面にも赤彩が施されていたものと推測できる。体部上半に粗雑な櫛描横線文と刺突文、体部下方には穿孔が１箇所施されている。３はいわゆる瓢壺である。口縁部は欠損しているが内弯するものと思われる。体部低位に最大径があり、下膨れ状を呈している。外面にヘラミガキが施されている。

４と５は器台。４の脚径は 13cmで口径を大きく凌駕する。脚部は明確な円柱部をもたず、受部から直ちに外反する。外面にヘラミガキを施すが、やや粗雑なため一部にハケメが残る。５は粗製の器台である。外面のヘラミガキは粗雑でハケメを多く残す。

図 10　ＳＨ 324 遺物出土状況図・見通し断面図（1:40）

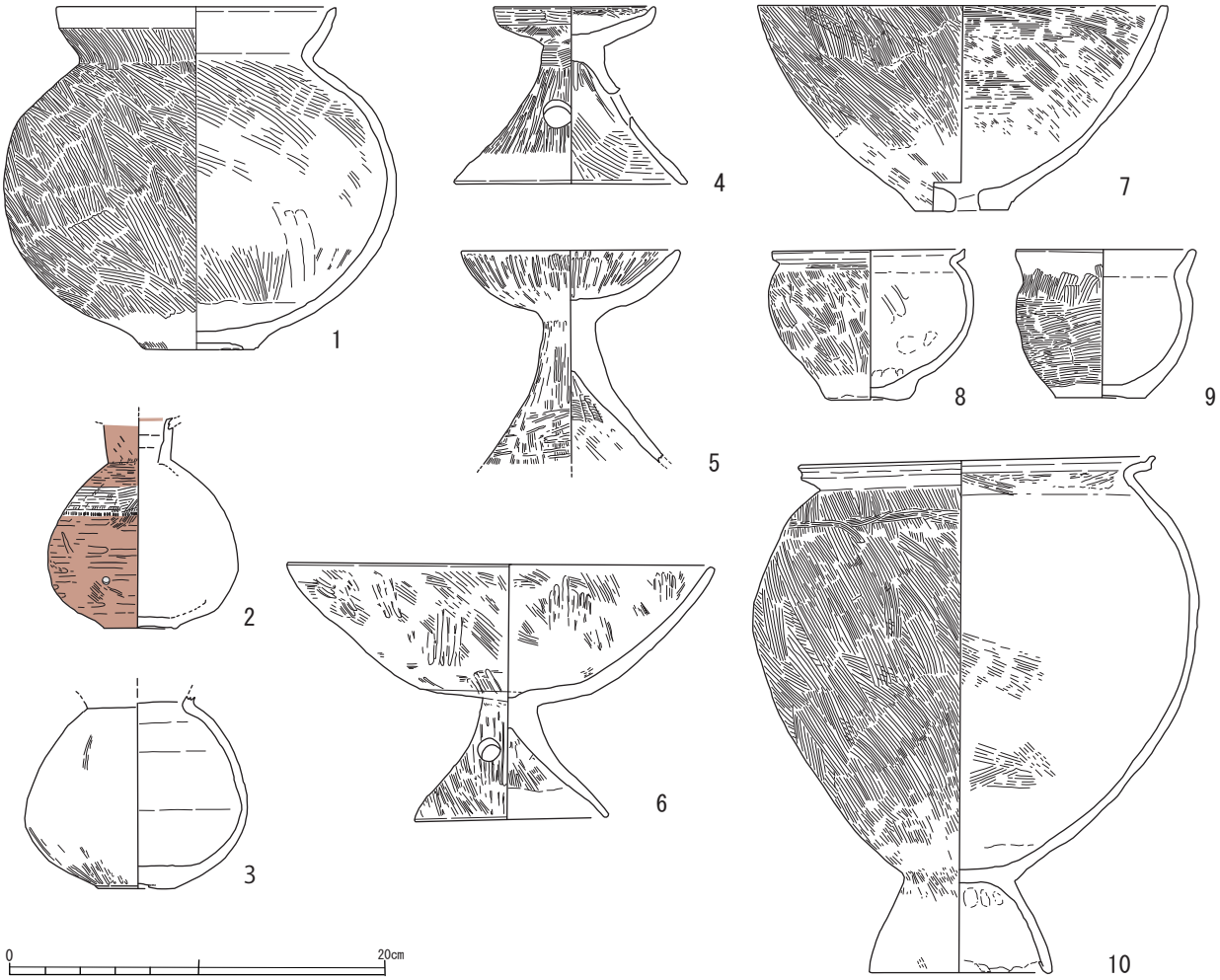


図 11　ＳＨ 324 出土遺物（1:4）

色調も４が赤褐色を呈するのに対し、５は黄橙色を呈する。

６は高杯。杯部が強く外傾する。口径は23cmで脚径11cmを凌駕する。脚部高は５cmで低下の傾向がみられる。脚部の内弯は端部にのみ残り、透孔は３方に施されている。外面はハケメ後に粗雑なヘラミガキが施されている。

７は甑、８・９は小型の鉢。いずれもハケメによる調整が施されている。

10は甕。いわゆるＳ字甕であるが、口縁部に刺突文は無く、口縁部の外傾も弱い。体部は肩が張らず球形を呈する。肩部の横線は粗雑で退化傾向が窺える。ハケメは深く掻き取るようなものではなく、浅いものである。

以上、各土器の特徴から導かれる時期としては、廻間Ⅱ式期が有力であろう。瓢壺は廻間Ⅱ式４段階をもって消失するとされるが、３はそのなかでも後半の特徴がみられる。小型器台は廻間Ⅱ式１段階をもって成立し、Ⅲ期まで存続するとされる。したがってこの２つが共存する時期として廻間Ⅱ式後半が想定できる。６の高杯の特徴も廻間Ⅱ式後半とするに矛盾しない。ただし、10のＳ字甕については、外面の調整に新しい要素がみられるものの、体部の器形に廻間Ⅱ式前半の要素が残る。この点について、小牧南遺跡の独自性をみることができるかどうかは、今後の整理作業の進捗に合わせて考えていきたい。

４．まとめ

縄文時代中期　この時期の竪穴住居と掘立柱建物は前回の調査でみつかったものと合わせると、県内最多の検出例となる。また、前回同様、竪穴住居の多くが同じ場所で２回程度建て直されていることが分かった。このような入れ子状になる重複以外では、ＳＨ248とＳＢ292、ＳＨ344とＳＢ361の重複がみられるのみで、掘立柱建物同士や竪穴住居同士の重複はみられなかった。掘立柱建物は、３間×２間の大型のもの（ＳＢ276・289・292）と、２間×１間の小型のもの（ＳＢ280・287・327・361・362）が存在することが分かった。これらの建物の同時存在についてどこまで追求できるかは今後の課題である。集落構造については、大型の掘立柱建物の並び等から環状集落的な指向の一端を読み取ろうとする試みもあってもよいが、現段階では、竪穴住居や小型の掘立柱建物の配置にはあまり規則性は感じられない。大型掘立柱建物の並びについては、斜面の傾斜の角度や台地縁辺の形状に沿った結果であるとみた方が自然であると思われる。

古墳時代初頭　竪穴住居や土坑からは、多量の土器が出土しており、一括性の高い好資料を多数得ることができた。

竪穴住居は、出土遺物から３期程度に細分できる可能性があり、今後さらに詳細な検討を行うことで、当時の集落構造やその変遷についてより明確にできる可能性がある。

［註］

① 以下、この地域の台地や丘陵の名称については、四日市市土地分類調査会1992『四日市市の土地分類』四日市市に従う。

② 以下、「陥し穴」の表記と陥し穴については、今村啓爾1983「陥し穴」『縄文文化の研究』２生業　雄山閣に依る。

③ 下記編年の４期～５期にあたる。
纐纈茂・髙橋健太郎2008「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

④ 石井寛氏（元横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）のご教示による。

⑤ 春日井恒・長谷川幸志「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落･墓地と生業』関西縄文文化研究会

⑥ 第４章参照。

⑦ 篠原英政・吉田英敏1989『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会

⑧ 大江まさる1973『炉畑遺跡－第１～５次発掘調査報告書－』各務原市教育委員会

⑨ 吉田英敏1994「宮之脇遺跡Ａ地点」「宮之脇遺跡Ｂ地点」『川合遺跡群』可児市教育委員会

⑩ 穂積裕昌他2005『菟上遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター

⑪ 縄文時代の掘立柱建物の上屋構造については不明な点が多いため、「梁行」「桁行」「間」などの用語は便宜的な使用である。

⑫ 前掲註③

⑬ 器種認定は現段階での暫定的なものである。

⑭ 田部剛士2003「縄文時代前期・中期の石材利用」『縄文時代の石器－関西の縄文前期・中期－』関西縄文文化研究会

⑮ 以下、この時期の土器の分類・編年および年代観については、赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センターを参考にした。